

出土品にみる履物の移り変わり

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した古墳時代から江戸時代の下駄

履物とは ヒトは素足で歩行できます。夏の暑い日は素足の方が心地よいものですね。とはいうものの、ヒトの歴史をかえりみると、身にまとう衣服と合わせ、足を保護し、歩行を助ける様々な履物が発達してきました。

履物は足へ着装する方法から、足はなの指で鼻緒おを挟んで履く下駄・草鞋・ぞうり・草履などの「鼻緒履物類」と足の甲むねまでを包む木沓などの「被甲履物類」に大きく分けることができます。それでは京都の遺跡の出土品から、それぞれの履物の移り変わりを見ていきましょう。

下駄 下駄は古墳時代中期に朝鮮半島から伝わり、現代まで履物

として利用され続けています。板材を成形して、足裏をのせる台、接地用の突起部である歯、鼻緒を通す孔を加工します。台の平面形は小判形や隅丸長方形などの違いがありますが、時代による規則性はないようです。台が小型の下駄は子ども用でしょう。ただ、古墳時代の下駄では鼻緒のつま先部分の孔の位置が左右に異なるものがあり、右足用と左足用で作り分けていたことがわかります。やがて平安時代には鼻緒の位置が現代と同じ中央に移動します。

下駄の構造は歯の形状で分類することができます。一つの板材から歯を削り出す連歯下駄、台とは

別の材で作った歯を差し込む差歯下駄、歯を成形しない無歯下駄(削げた下駄)があります。古墳時代以降、現代までに作られた下駄の大部分は連歯下駄です。差歯下駄の起源はよくわかりませんが、桃山時代には存在し、江戸時代に盛行しました。無歯下駄は台の接地面の一部を削り込んだ形状の下駄で、舞妓さんが履く「ぽっくり」がこれにあたります。無歯下駄も桃山時代には存在しました。

なお、出土する下駄は現代のものに比べると概ね小さめです。これは台から踵かかとがはみ出した状態で下駄を履いていたためと考えられます。



木沓



草履芯板の出土状況と草履着装の図（右下）



草鞋の出土状況と草鞋着装の図（右下）

草鞋 ^{わらじ} 草鞋は稲わらを編んで作る履物で、草履^{ぞうり}とともに平安時代以降、広く普及しました。草鞋の製作には特別な工具は不要です。紐状に撚った稲わらを足裏の大きさに合わせて楕円形に編み込んで台の部分成形し、さらに鼻緒、足首^{くく}に括りつけて固定するための紐を作り足します。

草鞋のように植物の茎や繊維を編んで作る履物は、履物の歴史の中でも早くに出現していたと考えられます。しかし、消耗が激しく、また、土中で腐朽しやすい素材のため出土例はほとんどありません。

草履 草履は足裏をのせる台の部分と鼻緒からなる履物で、草鞋に見られる足首に固定するための紐はありません。簡便に着脱できることから現代でも広く使用されています。

元々は稲わらを編んで作りまし

たが、やがて薄い板を芯にして、稲わらのほか皮革や樹皮など、いろいろな素材をつなぎ合わせる草履が作られるようになりました。芯の板には他の素材をつなぎ合わせるための小さな孔や欠き込みが加工されています。

なお、鼻緒がなく足先を引っ掛けるスリッパ状の履物が普及するのは近代になってからです。

木沓 ^{くつ} 沓はつま先から踵までの全体をおおう履物です。古墳時代後期には朝鮮半島の影響を受けた装飾性豊かな金銅製の沓が有力者の古墳に副葬されました。律令制の導入にともなう衣服制度では、革製の沓が礼装の一部として取り入れられますが、やがて木製・布製・紙製の沓が作られるようになりました。現代でも神職らが儀式で着用しています。

木沓は板目材を刳り抜いて成

形しており、つま先上部の稜線は革製の沓の形を意識したようです。木沓は革製や布製の沓と異なり柔軟性がないことから、素足より大きく作って、内側には布などの緩衝材を貼り、また、現代の靴^{しどうず}下にあたる襪という袋状の履物を着装して履いていました。出土品には踵に大きな穴が開いた木沓がありますが、これらの緩衝材があったため履き続けることができたようです。

実用性と装飾性 出土品から様々な履物を紹介してきました。多くは生活の中で実用品として使用された履物です。しかし、下駄には塗り下駄、また、装飾性の高い草履があったことも知られています。実用性だけではない、足元を美しく見せる履物のファッション性にも注目していきたいところです。

（山本雅和）